

Title	花と幽玄と器と：世亜彌の稽古思想
Sub Title	Zeami's educational theory of training in No Drama
Author	中山, 一義(Nakayama, Kazuyoshi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1961
Jtitle	哲學 No.41 (1961. 12) ,p.103- 113
JaLC DOI	
Abstract	Zeami was great not only as an actor and a writer of No Drama, but also as a theorist who had performed his esthetic and educational theory on a basis of the Buddhist logic. The present thesis has made inquire into three basic principles of his educational theory, how to get training to become a good actor. Of these three principles, the first one is 'Hana' meaning a flower fresh and charming, that is a principle of exhibiting skilfulness performing the drama. The second one is 'Yugen' meaning profound beauty, that is an esthetic principle ruling over act and dance, song and music, and every thing else composing the drama. The third one is 'Utsuwa' meaning a case or a vessel, that is a principle of actor's talents or genius. These principles are clearly explained on a basis of the Buddhist philosophy in his secret writings which were given only to the permitted successors.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000041-0103">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000041-0103</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 花と幽玄と器と

## — 世阿彌の稽古思想 —

中山 一 義

中古以来、諸芸能に、それぞれ理論が生れ、そのまた理論の中には教育論ともいふべき、稽古・学習の思想が見いだされる。このやうなわが国中世の教育論の根底には、仏教の哲理があるらしい。中世の芸能人はそれぞれの芸能の理論を、仏教の論理で地固めをしてゐる。その模様は、今日の眼から見て、いろいろな意味で、思想史的に興味がある。「形相を有となし形成を善となす泰西文化の絢爛たる発展には、尙ぶべきもの、学ぶべきものの許多なるは云ふまでもないが、幾千年来我等の祖先を孚み来つた東洋文化の根底には、形なきものの形を見、声なきものの声を聞くと云つた様なものが潜んで居るのではなからうか。我々の心は此の如きものを求めて己まない。私はかゝる要求に哲學的根拠を与へて見たいと思ふのである。」とは、わが国近代の代表的な一哲学者の言葉であるが、世阿彌の能楽についての稽古思想などを、研究するには、まづ、右のやうな目当てを、凡そ持つことは許されるかもしれない。

花

世阿彌は、能を面白く、また珍らしく見せるための演出の原理ともいふべきものを、「花」と呼んでゐる。

「風姿華伝」(通称「花伝書」)の第七別紙口伝に、世阿彌は、面白さの由つて来るところを、「花」に喩へた理を、次のやうに説明し、「花を知ること」の意義を述べてゐる。

この口伝に、花を知ること、先づ、けんりやう仮令、花の咲くを見て、よろづ萬に花と喩へ始めし理を弁ふべし。抑々、花と言ふに、萬木千草に於いて、四季折節に咲くものなれば、その時を得て珍しき故に翫ぶなり。申樂も、人の心に珍しきと知る所、即ち、面白き心なり。花と、面白きと、珍しきと、これ三つは、同じ心なり。いづれの花か散らで残るべき。散る故によりて、咲く頃あれば珍しきなり。能も住する所無きを、先ず花と知るべし。住せずして、余の風躰に移れば、珍しきなり。但し、やう様あり。珍しきと言へばとて、世に無き風躰を為出すにてはあるべからず。花伝に出す所の条々を、悉く稽古し終りて、さて、申樂をせん時に、その物数を、よう用々に従ひて取り出すべし。花と申すも、萬の草木に於いて、いづれの四季折節の、時の花の外に、珍しき花のあるべき。その如くに、習ひ覚えつる品々を究めぬれば、時折節の当世を心得て、時の人の好みの品によりて、その風躰を取り出す。これ時の花の咲くを見んが如し。花と申すも、こぞ去年咲きし種なり。能も元見し風躰なれども、物数を究めぬれば、その数を尽す程久し。久しくて見れば、又珍しきなり。その上、人の好みも色々にして、音曲・振舞・物真似、所々に變りてとりどりなれば、いづれの風躰をも残しては叶ふまじきなり。然れば、物数を究め尽したらん為手は、初春の梅より、秋の菊の花の咲き果つるまで、一年中の花の種を持ちたらんが如し。いづれの花なりとも、人の望み、時によりて取り出すべし。物数を究めずば、時によりて花を失ふ事有るべし。例へば、春の花の頃過

きて、夏草の花を賞翫せんずる時分に、春の花の風躰許りを得たらん為手が、夏草の花は無く、過ぎし春の花を、又持ちて出でたらんは、時の花に会ふべしや。これにて知るべし。ただ、花は、見る人の心に珍しきが花なり。然れば、花伝の花の段に、「物数を究めて、工夫を尽して後、花の失せぬ所をば知るべし。」とあるは、この口伝なり。されば、花として別には無きものなり。物数を尽して、工夫を得て、珍しき感を心得るが花なり。「花は心、種は態。」と書けるもこれなり。

この口伝を読んで、稽古思想の上から、次の諸点にとくに注目すべきであると考へる。

(一) 能を面白く(また珍しく) 見せるための芸案とも名付くべきものを、「花」といふ言葉で言ひあらはした理由の説明はまことにすばらしい。見物の側にひき起す感興としては、「面白く」と「珍しく」といふ二つの心理で説明されてゐる。「いづれの花か散らで残るべき。散る故によりて、咲く頃あれば珍しきなり、」といふ花の自然の生態を、そのまま、演能の実態になぞらへてゐる。「能も住する所無きを、先づ花と知るべし。住せずして、余の風躰に移れば、珍しきなり」といふ理がつづいて述べられるが、一所不住は、仏教哲理の訓へる万物の実相である。「花と申すも、萬木千草に於いて、いづれか四季折節の、時の花の外に、珍しき花のある」筈はないから、「時折節の当世を心得て、時の人の好みの品によりて、その風躰を取り出す」がよい、と言ひ、時の移り、所の変り、人の心に順応することを説く。このことをまた、世阿彌は、別紙口伝の他の所では、「この風躰の品々も、当世の衆人所々に亘りて、その時の遍き好みによりて取り出す風躰、これ用たる為の花なるべし。ここにこの風躰を翫めば、かしこに又余の風躰を賞翫す。これ人々心々の花なり。いづれを真とせんや。ただ、時に用ゆるをもて花と知るべし。」

し」と述べてゐる。所謂花の公案といはれるものが、これである。

(二) 花の理<sup>ことわり</sup>を右の如く、解するならば、時処人に応じ、もつともふさわしい風貌を演ずる用意が常になければならぬ。ここに、稽古の目標や方法といふものが規定されてくる。

まづ「物数を究め」る必要がある。「初春の梅より、秋の菊の花の咲き果つるまで、一年中の花の種を持つてゐれば、「人の望み、時によりて取り出す」ことができるわけで、若し、「物数を究めずば、時によりて花を失ふ事有るべし」と言ふ。これは花の種を数多くもてといふのである。

(三) しかしながら、花の種は、種だけとして見れば、要するに種に過ぎない。時処人の如何に応じて、手持ちの種のうち、どの種をどのやうに取り出すかを決定するのは、種そのものではなくて、種以外の何ものかの働きである。「花は心、種は態<sup>わざ</sup>」といふことばのうち、「花は心」の心が、その働きに相当するのであらう。「物数を究めて、工夫を尽した後、花の失せぬ所をば知るべし」といひ、また、「されば、花とて別には無きものなり。物数を尽して、工夫を得て、珍しき感を心得るが花なり」といふ、花の失せぬ所や、珍らしき感を心得るための、工夫公案を尽すところに、自得されるものを指して、「花は心」と言つてゐるらしい。

## 幽 玄

幽玄美は、中古以来、世の上下に広く賞美され、高く評価されてきた。観阿彌・世阿彌父子は、能といふ新しい芸能を作つて、これを大成するに当り、幽玄美の伝統の上に立ち、幽玄を以て能を統制する美の原理とした。能を構成する音楽的要素たる歌曲も、舞踊的要素たる舞ひ働きも、演劇的要素たる物真似も、すべてにわたつて、幽玄美の支

配を認めた。幽玄風の芸を本風と称し、本風を演ずる芸能者の、衆人に愛敬され、その芸の生命の長久なることを、左のやうに述べてゐる。

大方、能の是非分別の事、私ならず。都鄙遠近に名望を得る芸風なれば、世もて隠れあるべからず。然れば、能の風曲、古躰当世、時々変るべきかなれども、昔より天下に名望他に異る達人は、其の風躰、いづれも〳〵幽玄の懸りを得たり。古風には、田楽の一忠、中頃当流の先士観世、日吉の犬王、これは皆、舞歌幽玄を本風として、三躰相応の達人なり。其の外、軍躰碎動の芸人は、一旦名を得るといへども、世上に堪へたる名聞なし。さる程に、真に幽玄本風の上果の位は、時々当世によりても、見風変るまじきかと思えたり（能作書）。

幽玄本風の上果の位は、いつの世にも名声をうしなわぬであろうが、幽玄風を離れた軍体、碎動などの強く荒い芸風の役者は、一時の名聞を獲ることはあつても、その名声の長つづきすることはあるまい、といつてゐるのである。世阿彌は、「九位」といふ伝書の中で、幽玄美が、能芸術の美的統制の原理たることを、理論的に体系づけてゐる。要旨を表示すれば、左の通りである。（能勢朝次著「世阿彌十六部集詳釈」上 五八〇頁に拠つて作成）

## 九 位

妙花風（上ノ上）言語を絶した妙風  
上三花 寵深花風（上ノ中）有無中道の見風  
閑花風（上ノ下）道花の得法により安き位に到る境

花と幽玄と器と

中三位 正花風（中ノ上）二曲三体に通じ、物数を究め、能芸の花を得た境  
 広精風（中ノ中）歌舞二曲の素地に、三体物真似を習得せる境

浅文風（中ノ下）歌曲舞曲を習得し、幽玄風の素地を築く境

上三花、中三位は幽玄風を根底とす。

下三位

強細風（下ノ上）細かいが、幽玄風を欠いた強い芸風  
 強龜風（下ノ中）強く荒い芸風  
 龜鉛風（下ノ下）荒くて、なまれる芸風

以上幽玄風を欠く。

芸位、芸風に九つの品等を立てたのは、浄土九品の思想に影響されたものであらう、と言はれてゐるが、世阿彌は、更に、生涯稽古の考へに立つて、九位に習道の順序を定め、次のやうな芸能の学習理論を展開してゐる。

### 九位習道の次第条々

中初・上中・下後と言ふは、芸能の初門に入りて、二曲の稽古の条々をなすは、浅文風なり。これをよくよく習道して、既に浅風に文をなして、次第連続に道に至る位は、はや広精風なり。爰にて事を尽して、広大に道を經て、既に全果に至るは正花風なり。これは二曲より三躰に至る位なり。各々安位感花に至る處、道花得法の見所の切界なり。これは今までの芸位を直下と見下して、安得の上果に座段する位、閑花風なり。此の上に切位の幽姿をなして、有無中道の見風の曲躰、寵深花風なり。此の上は言語を絶して、不二妙躰の意景をあらはす處、妙花風なり。これにて奥義の上の道は果てたり。抑々此の条々の出所は、広精風なり。これ芸能の地躰にして、

ひろくこまやかなる萬徳の花種を顯す所なり。然れば、広精より前後分別の岐堺、これにあり。爰にて、得花に至るは、正花風に上り、至らざるは下三位に下るべし。さて、下三位は、遊樂の急流、次第に分れて、習道の大事もなし。但し、此の中三位より上三花に至りて、安位妙花をへて、さて却来して、下三位の風にも遊通して、其の態をなせば、和風の曲躰ともなるべし。然れども、古来、上三花にのぼる堪能の芸人どもの中に、下三位には降らざる為手どもありしなり。これは、「大象兎蹊に遊ばず」と言ふ本文の如し。爰に、中初・上中・下後までを悉くなしし事、亡父の芸風にならでは見えざりしなり。其の外、一座棟梁の輩、至極広精風までを習道して、正花風にも上らずして、下三位にくだりて、終に出世なき芸人ども幾多ありしなり。結句、今程の当道、下三位を習道の初門として、芸能をいたす輩あり。これ順路にあらず。然れば、九位不入の当道多し。さる程に、下三位に於いて、三数の道あり。中初より入門して、上中・下後と習道したる堪能の達風にては、下三位にても、上類の見風をなすべし。中位広精風より出でて、下三位に入りたるは、強細・強龜の分力なるべし。其の外、徒に下三位より入門したる為手は、無道無名の芸躰として、九位の内とも言ひ難かるべし。これ等は、下三位をのぞみながら、下三位にも座段せぬ位なり。まして中三位等などに至らん事、思ひもよらぬ事なり。

右の「九位習道の次第条々」を、表示すれば、次の如くなるであらう。

#### 幽玄風

(一) 浅文風↓広精風↓正花風↓閑花風↓寵深花風↓妙花風↓下三位

亡父観阿彌は、上三花から却来して下三位にも遊道し、和風の曲躰をなすことができた。



(一) 浅文風↓広精風↓正花風↓閑花風↓寵深花風↓妙花風

「大象兎蹊に遊ばず」の言葉のやうに、古来上三花に上つて、下三位に下らない堪能の芸人が多かつた。

(二) 浅文風↓広精風↓正花風

得花の境地に到る。

(三) 浅文風↓広精風↓下三位

得花の境地に遂に到りえぬ。

非幽玄風

(四) 下三位より入る者

下三位より入るは、順路にあらず、無道無名の芸人、九位の内とも言ひ難し、下三位を望みながら下三位にも座段せず、まして中三位など至ることは思ひもよらぬ。

九位・九位習道の次第の理論には、次の如き眼目が数へられるであらう。

(一) 芸位・芸風を考へるに、幽玄風を本風として、芸能者の生涯にわたる芸域を、九つの品等にわけ、さらに、それを上・中・下の三つに分け、上中は幽玄風、下は非風としてゐる。

(二) 稽古はまづ、中の下たる浅文風から始め、幽玄風を本体として、歌舞二曲の基地を作れといふ。「花伝書」の年来稽古では、二十代以前に当る。次に、広精風に進み、ここで物真似のかづかづを学ぶ。二十代以後の稽古を指す。

(三) 歌舞二曲の基地もでき、老女軍三体物真似の基本の稽古も、広く精しく学んで、伎芸の上では、かなりの達者な境地に到り得ても、(言ひ換へると、花の種はある程度持ち得ても) いまだ、芸の花を咲かせる公案<sup>きかい</sup>を自得しないものは、広精風の境から、正花風には、上ることはできない。この分れ目を、「前後分別の岐<sup>きかい</sup>堺」であるといひ、

この辺りにとどまり、遂に生涯得花の境に到りえない芸人の少くないことを説いてゐる。

(四) 上三花に上るものは少いのは、いふまでもないが、更に上三花から、下三位に下るものは更に、稀なこと、しかも、下三位の芸を真に和らげ活かすことは、上三花から下つた芸人のみに可能なこと。

(五) 得花に至らぬ芸人は、結局、下三位に下ること。

(六) 浅文風から始めずに、下三位より入門した芸人は、無道無名の芸体のものとして、九位の外に放逐してゐる。芸道への正門はどこまでも、中初であり、それより、上中・下後と進むことが、習道の正しい順序であるといふこと。

## 器

世阿彌は、伝書「遊楽習道風見」の中で、能役者を器に喩へてゐる。この比喩もまた、稽古思想を考へる上から、興味深い。

論語<sup>ニ</sup>云フ、子貢問<sup>フテ</sup>曰ク、賜<sup>ヤ</sup>也如何、子曰ク、汝<sup>ハ</sup>器也。(孔安国云フ、言<sup>ニ</sup>汝<sup>ハ</sup>器用之人<sup>ト</sup>也。)曰ク、何<sup>ノ</sup>器<sup>ソヤ</sup>也。曰ク、瑚璉也。(苞氏云フ、瑚璉<sup>トハ</sup>者、黍稷之器也。宗廟ノ器之貴<sup>キ</sup>者也。)

抑々、器の事、当芸に於いて、先づ、二曲三躰より萬曲となる数達の人、これ器用なるべし。諸躰に亘りて広態の見勢を、一身多風に所持する力道、これなり。二曲三体の見聞、いづれも延感をなして、不増不減の得益あらん所、これ器物なり。

有無二道にとらば、有は見、無は器なり。有を現はす物は無なり。縦へば、水晶は清浄躰にて、色文無縁の空躰なれども、火生水生をなせり。火水の別性を、無色の空躰より生ずる事、これいづれの縁生ぞや。或る歌に、

「桜木はくだきて見れば花もなし、花こそ春の空に咲きけれ。」と言へり。遊樂萬曲の花種をなすは、一身感力の心根なり。ただ水晶の空鉢より火水をなし、桜木の無色性より花実を生ふる如く、意中の景より曲色の見風をなさん堪能の達人、これ器物なるべし。

凡そ風月延年の飾り、花鳥遊景の曲、種々なり。四季折々の時節により、花葉・雪月・山海・草木、有情・非情に至るまで、萬物の出生をなす器は天下なり。此の萬物を遊樂の景鉢として、一心を天下の器になして、広大無風の空道に安器して、是得遊樂の妙花に至るべき事を思ふべし。

世阿彌は、器の比喻を、論語の公冶長篇にある、孔子と子貢との問答から採つてゐる。賜（子貢の名）は物に喩へたら何に当るでせうか、といふ子貢の問に、孔子は答へて、汝は器であるといふ。如何な器でせうか、といふ重ねての問ひに、答へて、孔子は、宗廟の祭の際に黍稷を盛つて供へる貴い器であらうといった、といふ問答を掲げ、世阿彌はこの問答に出てくる「器」といふ語を採り出して、二曲三体を基本にして、さまざまの曲を演じうる達人を器用人と呼び、これはまさに一身心を器として、多種多様の芸態を演じうる力量であるともいえるし、また、学び収めた二曲三体の見風聞風がひろがつて、無限の効果をあげる器物のやうなものである、といつてゐるのである。

中段には、世阿彌は、さらに仏教の空無の論理を採りあげて、器の考へをこの論理を以て裏付けてゐる。空無の論理で解釈すると、役者の演じる萬曲は見で、これを有と解し、役者自身の身心は器で、これを無と考へるのである。演じられる萬曲、即ち有を現はすものは、演者の「意中の景」、即ち無であると言ふのである。それはあたかも水晶から水火が生じ、桜木から花実が生じると同じで、演者の「意中の景」を水晶や桜木の無色性に喩へ、「意中の景」

(無)から、「曲色の見風」(有)を生み出す役者は、器物と考ふべきである、と説いてゐるのである。

世阿彌は更らに、天地を空無なる器と解し、無なる天地は、四季折々の時節に応じ、萬物を出生するが、それと同じ様に、能役者は、自己の身心を天地とし、無なる天地が萬物を出生する様に、萬曲を演じうることを念願すべきであると説いてゐる。ここに、能楽稽古の理想が説かれてゐる、と見ることができよう。「凡そ風月延年の飾り、花鳥遊景の曲、種々なり。四季折々の時節により、花葉・雪月・山海・草木・有情・非情に至るまで、萬物の出生をなす器は天下なり。此の萬物を遊樂の景躰として、一心を天下の器になして、广大無風の空道に安器して、是得遊樂の妙花に至るべき事を思ふべし。」能役者たるもの、この境地を理想とすべしといふのであらう。

(附記)

一 昭和十年のころ、岩波文庫「花伝書」を手にして以来、書きためた覚書の一部を圧縮したものが、前記の論稿である。旧仮名遣のままであるのは、旧稿をもとにしたからである。他意はない。

二 世阿彌の稽古思想には、前記のほか、「生涯稽古」「年来稽古」「花の公案」等、そのほかとりあげてみたい問題が、いろいろある。今後続けて発表したいと考へてゐる。

三 はじめに、わが国近代の著名な一哲学者と記したのは、西田幾多郎であり、あの文章は、「働くものから見るものへ」の序文の最後の一節である。

四 本稿中の引用は、主として、川瀬一馬著「頭注世阿彌二十三部集」に拠つた。